

おわりに

積極的に教室を出て、アクティブに「外」と触れ合う——一言で表せばそれが特徴の「法政アクティブリサーチ」にとって、「コロナ禍」はその存立にすら関わる重大なファクターである。本書冒頭の畠山クラスの振り返りでも触れている通り、今年度の活動においては昨年度後半以上に全面的に影響を被ることになった。本書記載の取材活動は、十分な配慮の下で行ったものであることを念のため記しておく。しかし、ここで特筆したいことは、新型コロナウイルスに振り回され満足な活動ができなかった、というようなネガティブなことでは決してなく、そのような困難な状況を前にしても決して怯むことなく正対して取り組み、本報告書の完成に辿り着いた受講生たちの逞しさと成長とである。

本科目はなにより「社会」と接するという、通常の講義科目では体験できない要素を中心に置いており、そのこと自体が学生にとってはまず超えなければならぬハードルとなるのであるが、そこに新型コロナウイルスの影響が加わった今年度は、困難の度合いが大きく高まったことは言うまでもない。しかし一方でこの状況は、彼らが近々出て行くことになる「社会」、すなわち就活や就職後を見据えてみれば、寧ろそこにおける「困難」を先取りしたものと見ることもでき、本科目を受講していない人たちより一足先に乗り越えておくという貴重な経験を経ることができたとも言えよう。端的に例示すれば、オンラインの活用が想起され、やがては「困難」と見られることさえなくなるかもしれない「ウィズ・コロナ」「アフター・コロナ」の社会に「一步」踏み出すことができた、このように評することもできよう。

他方、その踏み出しは「一步」に過ぎない、ということも注記しておかなければならない。まず、こうして本報告書が完成に至ったことは、受講した学生たち自身の努力の先にあるのは勿論であるが、困難な状況下にもかかわらず誠実かつ丁寧にご対応いただいた関係各所の皆様のご協力の賜物であることは、絶対に忘れてはならないことである。ご協力いただいた様々な方々の支えがあって初めて、本科目の多様な学びは成り立ち、本報告書という形で一応の成果に至ることができたということを、ここに改めて自覚し、感謝する謙虚な気持ちを大事にしなければならない。受講生及び教員一同、心より御礼申し上げます。

また、「はじめに」で斎藤先生が書かれていることとも通じるが、「一步」までは受講生の全員が踏み出すことができたと言えるだろうが、その「一步」をこの先どう進めるか、次なる「一步」をどう踏み出すかは、完全に一人一人に委ねられていることも、念のため指摘しておく。この先の、「社会」の中での成長こそ、ご協力いただいた皆様方に対する本当の意味での感謝の表れとなるであろう。

今年度は、昨年度開催できなかった合同報告会を開催できたことが、最も大きな成果の一つと言え、改めて区切りとして大きな意味を持つことが確認できた。「コロナ禍」はまだ当分続くと予想されるが、その中でも過度に委縮することなく、それこそ一歩ずつでも、学生たちの成長のために本科目がより有益な内容となるよう、我々教員もたゆまず努めて行くことを約し、今年度を締めたいと思う。

2021年7月21日

2020-21年度 法政アクティブリサーチ科目担当教員を代表して

畠山 亮

